シンポジウム特集記事 総説

人類学国際組織の動向

金 澤 英 作*

日本大学松戸歯学部解剖人類形態学

(平成 19 年 12 月 20 日受付, 平成 20 年 5 月 2 日受理)

要 約

人類学の国際組織として最も歴史の古い International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES, 通称ユニオン) は 1948 年に組織されたものであるが, 5 年に 1 回の本会議とその間に配置される中間会議などの開催準備や調整, またこの組織に登録された専門研究領域 (Commission) による国際的研究活動を行っている。日本が 1968 年に本会議を, また 2002 年には中間会議を開催したことは記憶に新しい。一方, ラテンアメリカの人類学会を中心とした World Council of Anthropological Associations (WCAA) が 2004 年にブラジルにおいて組織された。この組織は世界の人類学関連学会の連携と協力のため組織で, インターネットを活用して研究情報の交換, 研究協力などを行うことを目的としている。今のところ国際会議の開催などは予定されていないとのことである。本稿ではこれらの国際組織の動きと現在生じている問題点などについて情報を提供したい。

キーワード: 国際組織, 国際会議, ユニオン, WCAA

World-wide Organizations of Anthropological Societies

Eisaku Kanazawa*

Department of Anatomy and Physical Anthropology, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

(Received 20 December 2007; accepted 2 May 2008)

Abstract

International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES or Union) is the oldest international organization in anthropological science since it was organized in 1948. It has a world congress once in 5 years and some inter-congresses between two world congresses. Specific activities consistent with the objectives of the Union are carried out within the framework of the study groups called Commissions. It might be well remembered that the world congress was held in Japan (Tokyo and Kyoto) in 1968 and the Inter-congress was also held in Tokyo in 2002.

There is a new wave of information exchange at the global level of anthropology. World Council of Anthropological Associations (WCAA) was organized in Brazil 2004. This organization is a network of national and international associations that aims to promote worldwide communication and cooperation in anthropology. Its primary objectives are: to promote the discipline of anthropology in an international context; to promote cooperation and the sharing of information among world anthropologists; to promote jointly organized events

*日本大学松戸歯学部解剖人類形態学
〒271-8587 千葉県松戸市栄町西 2-870-1
E-mail: kanazawa.eisaku@nihon-u.ac.jp
©2008 The Anthropological Society of Nippon

of scientific debate and cooperation in research activities and dissemination of anthropological knowledge. Some problems and information arised in these organizations were discussed in this article.

Key words: IUAES, WCAA, anthropology, world organization

人類学の国際組織として最も歴史の古い International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES, 通称ユニオン) は 1948 年に組織されたものであるが、国際会議はそれに先立ち、すでに 1934 年にロンドンで開催されている。1938 年には第 2 回の国際会議がコペンハーゲンで開催され第 2 次世界大戦で中断され、戦後 1948 年にブリュッセルにおいて第 3 回大会が再開された時に恒常的組織として IUAES が設立された。その後 1968 年までは 4 年に 1 回、その後は 5 年に 1 回のペースで本会議が開催され、その間にはいくつかの中間会議があった。

日本人類学会は 1968 年、当時の日本民族学会と協力して東京と京都において第 8 回の IUAES 本会議を主催した。この会議は敗戦の混乱から復興し、研究活動や国際活動を開始した日本の人類学者達の献身的な努力により運営されたが、学問的内容的にも、また会場や接待などの運営面でも高い国際評価を受けた。

また、2003 年に都市センターホテル（東京）にて中間会議が開催されたことは記憶に新しい。この会議は *The human body in anthropological perspectives* という標題を掲げ、形質人類学的発表がメインになったが、アジアを中心に約 350 名の人類学者が集まり、各分野での国際交流を繰り広げた。

IUAES はさらに上位の国際的な科学者の組織である ICSU に加盟している。IUAES の内部組織は会長、副会長、常置委員会、理事会などからなり、理事は 50 カ国以上の加盟国の地域別代表が務めている。主な役職者としては現在、会長はメキシコの Prof. Luis Alberto Valgas 氏、事務局長はオランダの Prof. Peter Nas 氏、会計理事はアメリカの Prof. Tomoko Hamada 氏、東アジア地域代表理事としては日本の尾本恵市氏を挙げることができる。IUAES の目的としては人類学や民族学の国際協力や共同研究の振興、それらの機関への助成、あるいは ISSC, ICPHS, ICSU など他分野の国際組織との協力関係を築くことなどが挙げられている。

ユニオンには 27 のコミッションと呼ばれる専門研究領域の組織があり国際的研究活動を行っている。各コミッションは座長と委員からなり当該分野の情報を交換したり、共同研究を行い、定期的な情報発信を行うこと

になっている。すなわちユニオンは 5 年ごとの本会議や中間会議を開催する母体としての役割と世界の人類学者が常時、情報の交換や国境を超えた研究ができるような組織としての役割をもっている。

第 15 回本会議はイタリアのフィレンツェにおいて 2003 年夏に開催された。ヨーロッパの古都で開催されたこの大会には 2,000 名を超える参加者があったといわれているが、運営面では問題を残した大会であった。プログラムの不備、会場の案内の不徹底と設営の不備、抄録集の配布遅れと数々のミスプリ、など多々問題があり、参加者が街の中をウロウロしたり、発表者が集まらなかったりする光景が多く見られた。何とか会議は終わり、一般参加者はフィレンツェの観光でストレスを解消したものの理事など会議の関係者の中にはその後の対応、特に事後の会計報告がなかったことに対する不満が残った。

その後、2004 年にインドのカルカッタで、2005 年にはチェコのパルデビスで、2006 年には南アフリカのケープタウンでそれぞれ中間会議が開催された。2001 年のドイツ・ゲッティンゲンから数えると 2002 年の東京における中間会議を含め、ここ 6 年間は毎年 IUAES の会議が開催されたことになる。2008 年は中国・昆明での本会議を控えており、その流れを見るかぎり IUAES は順調のようであるが、実は雲行きが怪しくなっている。

2004 年に新しく世界各国の人類学会を統合するような組織が生まれた。この新しい国際組織については日本文化人類学会の大阪大学・小泉潤二教授が中心的役割を担っており、その設立の経緯について公表しているのでそこから引用する。

「2004 年 6 月、ブラジルのレシフェ市で開かれた中南米を中心とする国際会議（世界の人類学——国際組織の強化と人類学という職業の有効性 *World Anthropologies: Strengthening the International Organization and Effectiveness of the Profession*）において人類学会世界協議会—World Council of Anthropological Associations, 通称 WCAA—が結成された。国際会議は、ブラジル人類学会会長のグスタボ・リンス・ヒベイロ（Gustavo Lins Ribeiro）の提唱により、ウェンナーグレン人類学研究財団（ニューヨー

ク)の資金援助によって開催された。世界各国から14の人類学会の会長らが代表として集まり、人類学の国際連携と人類学の多様化について討議された結果、人類学会世界協議会の設立規約が作成され署名された。設立に参加した以下の14の学会は、2005年4月までにすべてWCAAへの正式加盟を決定した(米国人類学会、南部アフリカ人類学会、ブラジル人類学会、イギリス社会人類学会、オーストラリア人類学会、カナダ人類学会、ヨーロッパ社会人類学会、フランス人類学会、日本文化人類学会、インド人類学会、国際人類民族科学連合(ユニオン)、ラテンアメリカ人類学会、パンアフリカ人類学会、ロシア人類民族学会)。2004年10月24日、日本文化人類学会理事会は評議員会の審議結果を受けて、人類学会世界協議会—World Council of Anthropological Associations, 通称WCAA—に加盟することを正式決定した。」

WCAAの目的は、人類学研究を国際的に発展させ、世界の人類学者の間で協働関係を進め情報を共有し、科学的議論や研究協力によって人類学的知識を広めることとなっており、当面はインターネットを中心とした情報交換を行い、国際会議の開催は考えていないということである。

上記加盟学会の中にユニオンがあることに違和感を覚える人がいるかもしれない。事実、ユニオン内部においてももう一つの人類学の国際組織ができた事に対する不快感を示す意見や、歴史と伝統を誇るユニオンが新興のWCAAに「加盟」することへの反対論がインターネット上を飛び交った。しかし、結局、WCAAの設立は国際会議開催を活動の中心とするユニオンの今後の活動を否定するものではなく、むしろ共に情報交換を密に行うことによってよりよい人類学の発展を図ることを確認して騒ぎは収まった。

しかし、一連のこの騒ぎの中ではっきりしたことはユニオンの求心力が低下したことである。ここではその要因と考えられるものを挙げておこう。

1. 会費値上げなどのさまざまな決定が、規定に則っていない可能性がある。
2. 会計が不明瞭である。十分な能力を持ったスタッフが揃っていない。
3. 会員に情報が十分伝えられていない。ホームページも更新が遅く、乱れている。
4. コミッションが形骸化している。

UNIONには組織が大きくなってきたころにできた比較的厳密な規定が存在する。

これを見ると会長や役員の決め方、会計、などが細か

く規定されているが、実際は本会議や中間会議に集まれる役員数は十分でなく、規定どおりに行うことが難しくなっている。つい、集まった役員だけで会議を行い、物事を決定してゆく、ということになると思われ、事後の説明も不十分である。それを補うためにはメールやインターネットの利用が不可欠であるが、十分に機能していない。ホームページは新しい情報が掲載されず、開いた会員は失望することが多い。

日本学術会議に研究者連絡委員会(研連)という組織があったころ、ユニオンに対して日本を代表するアカデミーとしての加盟費を受け入れてもらうために、それまで規定になかった大口の加盟費、あるいは協賛金の受け入れを認めてもらうよう、当時日本学術会議会員であった尾本恵市氏、岡田守彦氏が二代にわたり、再三お願いしたことがあったが、なかなかこれが決まらず、長年月を要したことがあった。

コミッションも数は多いが、活動が行われず沈滞しているものも多い。勿論、コミッションを運営する研究者自身の研究活動は活発であると思われるが、それがユニオンの活動として表れていないということである。

このようなユニオンの現状を受けて、現在アメリカ人類学会(AAA)や日本人類学会などは会費の納入を見送っている。今後は常駐の事務局が十分な時間と労働力を確保して情報を発信し、役員を中心に会員のユニオンへの帰属意識を高め、ユニオンでの日常活動の重視を喚起することが求められる。

2008年、中国昆明で予定されていた第16回ユニオン本会議は開催に向けて準備が行われていたが、2008年5月上旬、中国側運営委員会から突然、延期の提案がされた。詳しい説明がなく、会員の間には混乱が生じたが、原因は、8月の北京でのオリンピック開催、チベットの人权問題など国内に山積する緊急課題と無関係ではないようである。1年後の2009年7月に改めて本会議が開催されるとのことであるが、予断を許さない。ユニオン執行部の指導力が十分発揮され、この困難を乗り切ってもらいたいものである。

引用文献

- 岡正雄(1969)第8回国際人類学・民族学会議を終えて. 民族学研究, 33巻3・4合併号: 203-204.
 IUAES ホームページ <http://www.leidenuniv.nl/fsw/iaaes/>
 日本文化人類学会 ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/jasca/>
 小泉潤二(2004)人類学会世界協議会(WCAA)の設立—人類学・民族学の国際連携に向けて. 文化人類学, 69巻4号: 607-612.